魔法先生の弟ってそれどんな苦行？

アドゥラ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生したと思ったら、何このテンプレ。

しかししかし、そんな上手くはいかないものです。

結局、流れ流れてたどり着いた場所は……あれ、ネギまじゃない!?

これは、原作主人公の弟だと思ったら、別の原作主人公の弟ポジションだった。そんな男の旅行記的なものである。

目次

苦行の一 ―― 1
苦行の二 ―― 11
苦行の三 ―― 24

苦行の一

「あー……喉乾いた」

こんにちは、ナベ・スプリングフィールドと申します。

現在6歳。世界を旅している小さな冒険家です。

名前で気がついた方もいらっしゃいますよね？　ええ、そうなんです。自分、スプリングフィールド家、つまり魔法先生ネギま！　の主人公であるネギ君の弟として生まれました。

え、小さすぎるのに冒険家するなよ、魔法学校に大人しく通っておけって？　ははは、いえ……魔力少ないんですよ。おまけに適性が光属性と回復系、共に中級が精一杯。

これでどうしろと？　死ねるぞ。悪魔襲撃の時はガチで死ぬかと思ったぞ。襲撃自体は知っていたから石化したみんなが壊れないように（壊れたら一生治せない）保護の魔法をかけてまわっていたんだぞ。

ええ、そうです。襲撃知っていた時点で分かりますよね。

実は自分……転生者ってやつです。

「オアシスだヒャッホー!!」

ちなみに、今はエジプトの砂漠越えにチャレンジ。いやいや、無理すんなって話ですけどね。追手から逃れるにはこれくらい……まあ、その話は後で。

まずは、転生のことでしたね。

まあ、神様のミスでも気まぐれでも何でもいいんですけど、転生するなら何処がいいって話になってネギま世界を頼みました。

いえ、別に原作ブレイクとかそういうのには興味ないんですよ。ネギ君たちに任せればハッピーエンドだし、別に自分はアンチじゃないんで。

仮におかしくなったら、黒幕とかのヒントをあげた方がいいのかなぁってぐらいにしか考えていませんでした。

自分としては、気とか使いたいよね。麻帆良に関してアンチする人多いけど、俺……ああいうカオスな学園に通いたかったの。

絶対に退屈させてくれないぜ！　まったく楽しみだった。だったのに……

生まれる家とか、完全ランダムなんだけどなぁ……

「ホント、どうしてこうなった」

めでたく主人公の弟ですよ、ええ……こういうときに限って大当たりを引く自分の引きの強さが恨めしい。っていうか、名前もネタだろこれ!!

モブその6とかそんな微妙なのでいいんだよ！　気なら死ぬ気で頑張れば取得でき

るだろ！　だからさ、こういうあからさまなフラグとかいいんだよ！

おまけに金髪オッドアイとか何処の中二だ!!

「……」

ああ、そうさ……見事に母親に似ていますね。もう……ここまでテンプレだと泣きたくなる。

おまけに、魔法への適性の低さで少し腫れ物扱いでした。兄であるネギやネカネさん、アーニャやスタン爺さんとの関係は良好ですよ。

早々に魔法への見切りをつけて気の習得を頑張っていたので魔法学校には入れませんでしたけどね。後ろ盾考えとけよ俺……

結局、死ぬ気で覚えた保護魔法と光の魔法の射手、あとは少々の治療魔法が使えるだけです。

気だって肉体強化しか出来てないよ。しかも魔法使ったほうが効率よかったかもってレベル……

「そうだ、京都行こう」

詠春さんなら父親と知り合いだし、話せば気の使い方ぐらいは教えてもらえそう。

ちなみに、こんな見た目だし、資料見つけちゃったから父親と母親については魔法学校の校長（つまり祖父）から教えてもらっています。あと、仲間のこととか、ある程度

ね。
　だって、この見た目だよ。魔法世界から狙われるよ。王家の魔力目当てに。
　むしろ今まさに狙われているよ。うん。
「げ、骨っぽい……魔族」
「怨みは無いけど、これも仕事だからねぇ。君、その歳でなにやらかしたの？」
「……自分ってより父親と母親が、ね」
「あー……同情はするけど手加減はしないよ」
「ははは……やっぱりっすか」
　結局、保護魔法と治療魔法で怪我はしないけど、ものすごいダメージと消耗でした。
　え、戦闘シーンはどうしたって？　そりゃぁ……ねぇ。
「ええい！　なんですかこの化け物!!」
「坊主、大丈夫かえ？」
「は、はい……あ、吹っ飛んだ」
　骨の方が。っていうか、アレって原作にでていた骨魔族じゃなかった？　あれ、地球にいてもいいのか？　あ、魔法世界人じゃなくて魔族だからいいのか。
　それよりも、今目の前に居る二人の方が問題です。
「……助けてくれてありがとうございます。ナベ・スプリングフィールドと申します」

「変わった名前じゃのう。ワシは浦島ひなたじゃ。今は孫の可奈子と二人で旅をしておるえ」

……これ、なんてラブひな？

◇◇◇

なんやかんやで、帰るところも無い（魔法適性殆ど無いのにウェールズに引きこもるのもアレだった。あと性に合わない）ので二人に同行することになりました。

ホント、どうしてこうなったんでしょうねぇ……

「いいですか、浦島流地獄極楽カメ縛りとは」

「子供に何教えようとしているんですか師匠」

現在、浦島可奈子（ラブひな主人公の浦島景太郎の義妹）さんに浦島流柔術を教えてもらっているのです。

なんか、筋がいいって褒められちった。

じゃなくて……この人、まだひなた荘に行く前なんだけど、いいのかそれで!?

なんかそっちの原作ブレイクしそうで怖いよ僕（絶賛混乱中）

「な、なんですかその面白い顔は」

「すいません少し混乱していまして……」

えっと、いま丁度世紀末だから、２０００年。たしかネギまが２００３年の３月くら

いからだよな……あーもうすぐ誕生日だよな俺。なんだかんだで一年近くこの人らと旅を……じゃなくて、ラブひなのタイムスケジュールを思い出せ。いつだ、いつから可奈子師匠はひなた荘を襲撃するんだったっけ？

「おばあさま……その、お願いがあるのですが」

「わかっとるわかっとる。まだ色々やることもあるえ、来年じゃな」

「はい。ナベはどうします？」

「あー連れて行って喫茶店の方にでも放り込んどけばええじゃろ」

「俺の扱いぞんざい!?　っていうかひなた荘って女子寮!!」

「お前より全員年上じゃから問題ないえ」

「それに私が旅館として再生させます」

　っていうか、なんでそっちの原作に介入フラグ立つんですかー!?　ネギまじゃないの!?

　いや、当初の目的の気を使うって浦島流教えてもらった段階で達成できているんだけどね。正当な後継者じゃないから5つぐらいしか技、教えてもらっていないけど。

「あと一年……お兄ちゃんに会えるまで、あと一年」

「師匠師匠、よだれ垂れてる」

　もういいや、嫌でも王位継承とか関わるんだろうし、ひなた荘行きってことはあの面

白おかしい出来事を後半だけでも堪能できるってことだから。

……なにそれワクワクする。

「まあ、師匠……諦めるつもりないんだね」

「誰に似たのかのぉ」

「絶対婆ちゃんだよ。だって、旅の目的がそもそも新しい恋を探すって……本気？」

「ワシはいつだって本気じゃ」

「うん、血はつながっていなくても婆ちゃんの孫だよ」

まあ、師匠だって兄と妹という関係も内心では捨てがたいと思っているし平気かな。

この時の俺は気がついていなかったが、後にその関係を捨て、兄を一人の男として見ると可奈子は言い出すのである。

「っていうか旅館にしてもいいの？」

「まあなるようになるじゃろ」

「案外、みんな婆ちゃんの手のひらの上だよねー」

この人、絶対に遊んでいるよ。楽しんでいるよ。孫を巡った愛憎模様を楽しみに眺めていやがる。

ちなみに、スプリングフィールドと聞いて、アイツはいい男じゃった……嫁さんと新婚旅行中だったんじゃがなの。とか言い出したときは噴いた。

なんで父さんと母さんと会ったことがあるんだよ婆ちゃん!!
もしかしてこのご老人、魔法について知っているのか？　政府の高官とかは知っているらしいし……
「いいよ、最後辺りに自分の予想を上回ることになってしまえばいい」
そのセリフが精一杯の反抗だった。
◇◇◇
「ついにこの日がやってきましたね」
「そーですね師匠……モツとシチミも疲れて寝たんで、俺もホテルで寝ますね」
「いいから手伝いなさい」
「アーッ」
４月上旬。一月後には８歳ですよ。既に時代は２１世紀ですよ。師匠たちと出会って既に２年とか笑えない。
ネギまが始まるまであと２年。その前に何故か放り込まれたカオス。その名もラブひな１１巻からの話。
ちなみに、ネギたちにはちょくちょく手紙を送っています。来年にはネギも卒業できそうなんで卒業祝いに帰省する予定。
半年もあればラブひなも片付くし、間の暇な時間で何をしようか考え中。

あと、この一年で何故か式神っぽい精霊のような何かと契約して、使い魔として使役しています。

そう、ネギま!?　のモツとシチミ。なんか混ざっているね（笑）。

いや笑っている場合じゃないけど……あと、本気用のオリジナル使い魔もいます。あれだよ、ラブひなって四神に対応した動物がいるから、それにあわせて中央の麒麟的なの作りました。

……自分、飛行魔法使えないので飛行手段として作ったら、中々の攻撃力だったってだけですけどね。あ、でも虚空瞬動だってネギまの後期からでているし、別にいいのか。

「ここが、お婆ちゃんのひなた荘……」

「師匠って本人がいないところだと、そういう砕けた呼び方に変わるよね」

「……」

無言のまま振り下ろされる、気のこもった一撃を脳天にサービス！

「れぽっ!?」

「くだらない事言っていないで入りますよ」

「……はい」

英雄の息子ですが、師匠には一生勝てない気がします。

そんな、俺……ナベ・スプリングフィールド。またの名を、浦島鍋の物語です。

あースプリングフィールドだと色々マズイときもあるから一応、別の名前で旅をしていたんです。
どっちにしてもナベって名前だけどな。

苦行の二

「この子の名前はクロ……そして、私は新しくひなた荘の管理人としてやってきました……浦島可奈子です。よろしく」

師匠が温泉で、ひなた荘住人に宣戦布告したとです。

◇◇◇

まあ、掻い摘んで言うとですね……まず、ひなた荘にやってきたのはいいけども、俺やることないんで工事業者の人と打ち合わせさせられていまして、その間に師匠はひなた荘の戦力調査（ようはブラコン妹による恋敵の調査）をしていました。それでも時間余ったから和風茶房「日向」で茶飲んでた。懐かしい味でなきそうだった。

で、そろそろかと思って俺が業者引き連れてやってきたら案の定だよ。必要なことを最小限以下しか話さないせいで一触即発ムード。むしろ、師匠は追い出す気満々だろ。

「ひなた荘をぶち壊す気かぁ!?」

「確かにオンボロですけどあんまりです!!」

上から、紺野みつね、前原しのぶ。うーん、みつねじゃなくてキツネって呼ばれるのも納得だ。胡散臭い上にキツネ顔。

ちなみに、師匠は「り……」とか呟いているところを見ると、リフォームするつもりだけということを隠す気はないらしい。

ただし、初対面の人には割と口下手な師匠のことだ。１０歳も俺より年上なのに対人スキルが俺より低いとか――

「ぬぼっ!?」

「余計なことを考えましたね……」

「スイマセン師匠」

口下手なせいで誤解されることも多いくせに……というか面倒になったから業者の人に「やっちゃってください」って余計に誤解される。

転生してから初めて踏んだ日本の地。色々やりたいことあるんだけどなぁ……ああ、しょうゆ味の何か食べたい。

「まったく、なんの騒ぎ……げ、可奈子」

「お久しぶりです。はるかおばさん」

「あーそういえば今頃満員の客が待っているころだし、急いで戻らなきゃな。ああ、忙しい忙しい」

「さっき俺が茶飲んでたときには誰もいなかったけど?」

「……さっきの坊主……チッ」

舌打ちしないでよ。

と、そこでラブひなメインヒロインの成瀬川なるさんがラブひな主人公と師匠の叔母である浦島はるかさんに食いかかる。

「逃げないでくださいよはるかさん！　っていうかいつも暇そうにしていませんでしたか!?」

「バレたか……」

「いや、バレバレですよ」

「仕方ないか……あー久しぶりだな可奈子。婆さんは元気か？」

「ええ、手に負えないくらいお元気です」

「そうかそうか……えっと、そっちの坊主は？　さっき喫茶店にいたけど」

「ああ、旅の途中で縁あって……まあ、私の弟子のようなものです。それはともかく、今日限りでこの女子寮は閉めますので」

「そ、そうかそれは残念だが仕方ないなー」

オイコラ少しくらいは言い返せよ。

みんな唖然としていらっしゃるではないか。

特に、時期的に新ローニンズのリーダーの素子さんとか伊達メガネずり落ちているよ。ビン底メガネとか初めて見た。

結局その後、ひなた荘の住人は一旦退却して作戦を練ることにしたようだ。
俺？　もちろん師匠に引き摺られたよ。哀れと思うなら笑うがいいさ。ラブひな最年少のサラよりも年下なんだぜ、俺。

◇◇◇

「あー茶が美味い……」
「あなたは時々日本人のような雰囲気になりますね」
「師匠たちと2年も一緒に旅していたからじゃないですか？」
「まあ、それもそうですね……ところで、学校には行くつもりはないのですか？」
「ひなた荘の件が一段落したら麻帆良に通うつもりですよ。あそこ知り合いいるんで便宜図ってもらうつもりですし」
「たしか、高畑さんでしたっけ？　あのメガネの」
「そう、一部ダンディなおじ様好きに受けそうな感じのあの人です」
　ああ、ネギと一緒に会ったことあるんだよ。デスメガネって普段は温厚な人だしね。あの人に言われたけど、俺って完全に魔法戦士タイプなんだよね。
　どうも、スプリングフィールド家に生まれたのにこの魔力量とか、自分の幼少期に被ったらしい。あの人って呪文詠唱できないから魔法使いとしては致命的とかあったな。

「可奈ちゃ……管理人さん、ちょっといいかな？」
「なんですか、成瀬川さん」
「えっと、お茶入れてきたんだけど……ほら、東大まんじゅう食べない？」
なるさんがお茶を入れてきたのはいいけど、まずは話し合いということか。まあ、この人普段は温厚（むしろ根はヘタレ）っぽいし、こうなるよねー
っていうか、東大まんじゅうってそんなのあるの？
※実際、それっぽいのあるらしいです。
「甘いもの嫌いです」
「バッサリ切るとはさすが師匠」
なるさんものすごくやり辛そうな顔をしていらっしゃるじゃないですか。
え、むしろ好都合？　あ、そうですか。なんだよ、ゆえ吉と同じ声のくせに。
「えっと、君は食べる？」
「貰います。甘いものはジャスティスです」
「じゃ、じゃす？」
「虫歯になりますよ」
「ちゃんと磨いておろう」
いいよ、もう。温泉ガメの温泉たまご（改めて考えると凄い名前だな。俺もだけど）と

遊んでいるよ。一度見てみたかったんだ。空飛ぶ亀のたまごちゃん（メスです）。
あー可愛いなぁ……たしか、乙姫むつみさんがつれてきたんだっけ？　一匹分けてもらえないかなぁ……
ちなみに、俺の後ろではなるさんが師匠になんでひなた荘を潰そうとしているのか聞いて、それに対して師匠は兄とはどういう関係なんですか？　と反撃。すごいや、分かりやすいぞなるさん。ものすごい動揺だ。これがリアルツンデレか……
ところで師匠、タイムスリップしたから帰ってこれないって言い訳は無理があります。
「うるさい」
「ぎゃもれっ!?」
「えっと、大丈夫なのその子？」
「平気です。やわな鍛え方していませんし。ところで、あの上の穴はなんですか」
そういえば、管理人室の上に大穴が開いているのだ。あれでは上の階の人がこまると思うんだけど……
と、なぜかなるさんは顔を赤らめている。
「え、ああアレね。ごめんねみっともなくて。あれは連絡用というか、何というか……まあ、私とアイツの糸電話のようなもので、あの……まあ、あると便利っていうか」

「ふーん」

みっともないと言いつつ、嬉しそうに話すなるさん。そうですか、それ以上師匠の機嫌が悪くなるととばっちりを受けるのは俺なんだけど、誰かこの流れをかえてくれ。

「な、なる先輩大変です！　住人の皆が工事に反対して座り込みを始めちゃいました!!」

しのぶちゃん助かった。マジで。この空気心臓に悪い！

◇◇◇

『我々は断固工事に反対する。こないに働かんでもダラダラすごせる場所は他にない！　あと家賃も安い!!　我々ズボラ人間は身体を張ってでも今回の工事を阻止してみせる!!』

おい、おいダメ人間!!　やっぱりキツネか！　なんだあの堂々としたダメ人間発言は!?　師匠と呼んでもいいだろうか？　え、あ、やだなぁ師匠はあなた様一人だけですよぉ……はい、二度と考えないので地獄極楽カメ縛りは勘弁してください。

実は、リフォームしているだけだからここまで大事にする必要ないけど（笑）

え、止めないのかって？　止めるわけないでしょ、こんな面白そうなこと。

俺は自覚はなかったが、この愉快犯的思考は間違いなく浦島ひなた婆ちゃんの影響だった。

「っていうか私ずぼら人間じゃないですよ!!」

「まあまあ、細かいことはええやろ」
「というかなんで座り込みに温泉なんですか!?」
「素子、こういうのはリラックスが大事なんやで」
「そうですよ。美味しいものを目の前にして尻込みするほうが失礼ですよ」
「お、坊主わかっとるな……って、どっちの味方何や？」
「あえて言うなら、面白いほうです」
「……」
「……」
　ガシッ←歳の差性別その他もろもろを越えた友情が芽生えた音。
「というわけで取り壊しはんたーい!!」
「スイマセン師匠、こっちの方が面白そうなんで!!」
「わははいいぞいいぞー！」
「工事のおっちゃんたちもなんでこっちにいるのか疑問だけどべつにいいやー」
　あれですね、水着の女の子がいる方がいいんですねわかります。
　とまあ、そんな感じでしたが師匠が遂に動いた。
「おーいみんなビッグニュースだぞ！　ひなた婆さんが帰ってきたんだ!!」
「え、うそ!?　ひなた荘のラスボスが!?」

「チャンスや！　あの婆さんなら可奈子に勝てるぞ!!」
「キャー早くおばあちゃんに会いましょう!!」
　だがしかし、それは師匠の特技の一つ。
　……職業怪盗でもいけるんじゃないのってくらいに、高レベルの変装である。
「それっ！」
「あーなにするんやはるか……って可奈子やとぉ!?」
「工事が終わるまでここで大人しくしていてください。ナベ、あなたもです」
「え、ナベって変な名前やな」
「今言うことですか!?　って、そういえば自己紹介していなかった!?」
「今更過ぎますよっ……ああ!?　空から鉄格子が!?」
「そうはいかん……はぁっ！　斬鉄閃!!」
　アレが噂に聞く神鳴流の技か……スゲェ、昔見たデスメガネの拳速を上回ってるぞ。
　鉄格子がまるでバターのように……ひ、人には使わないよね？
　っていうか、目が暗黒面に落ちていないかい？
「ふふふ、この程度で我々を拘束できると思うなよ……」
「も、素子無茶すんな!!」
「大丈夫です、キツネさん。む、そこか！　斬空閃弐の太刀!!」

「キャァァァァァ!?」
「なっ、しのぶ!?」
師匠の特技、変装に加えて変わり身の術。あの人本当は忍者じゃないのか？
流石に分身は出来ないけどね。
その後、師匠はカメが苦手な素子さん相手にカメのきぐるみ着て方を叩き、気絶させる。
即行で素子さんに変装の後、みんなの足を縛り付けて木に吊るす。
ものすごい、早業でした。
「さて、工事はもう最終段階です」
「ぐっ……ん――!!」
そこで、なるさんがひなた荘の前に出て、師匠を止める。
大きく手を広げて、その目には決意が宿っていた。
「ひなた荘は、壊させないわよ！　こ、ここには住民みんなの大切な思い出の場所なの！
貴女にだってあるでしょう！　大切な場所が!!　景太郎と約束したんだから！
帰ってきたら、一緒に東大に行こうって！」
「……約束？」
それは、師匠にとってＮＧワードというか、心の琴線に触れちゃう言葉です。

リフォームしているだけだからここまで大事に戦う……いや、女子寮はどの道やめるつもりの師匠だし、結局戦うことになるよね。うん。
「約束なら、私にもあるわ」
「――え？」
「あーすいませーん、これどうしますー？」
「空気読んでよ工事業者」
「やっちゃって」
「ししょおおおおおぉ!?」
人めがけて鉄球使うなぁぁぁあああああああああ!?
「やれるもんならやって……キャァあああああ!?」
「よけおったぁあああ!?」
「あんなの避けるしかないでしょ！　無茶言わないでよキツネ!!」
◇◇◇
結局、リフォームしただけだったのが判明し、空気が和気藹々として丸く収まる雰囲気になりました。
しかし、彼女らは知らない……師匠の恐ろしさを。策士系ヤンデレの恐さを。
「なんやなんや、ウチらのはやとちりかいな」

「そうだな、リフォームなら早く言ってくれればいいものを」
「ようこそひなた荘へ！　アンタが新管理人やー！」
「……、……新管理人として認めてくれるのですね？」
あー言質とっちゃったよ……
この人の恐ろしさは、あのひなた婆ちゃんの性質をあらゆる意味で受け継いでいることにある。
愛に生き、そのためならあらゆる策を考え、実行する。
言葉を考えて使い、自分に必要な一言を引き出す。
まあ、根は正直で優しい人なのであくどい事はしないし、かなり甘い部分もあるが。
みんな女子寮の存続を祝って宴会するつもりだけどそうは問屋がおろさない。
「女子寮？　それは今日を限りで終わりです。今日からここは旅館に戻します。正式名称は……旅館ひなた荘」
「え、？」
「もちろん宿泊費さえ払えれば今の部屋のままでも結構です。しかし、払えないようなら従業員として働いてもらいます。例外は認めません」
「……俺もですか？」
「もちろん。というか裏切ったのは誰ですか？」

「あははは……これが自業自得というやつか」

ちなみに俺の担当は雑務全般と時々厨房でした。

苦行の三

本日も晴天、快調快調。

「おい、ここで油売っていてもいいのか？」

「まあ師匠も鬼……ですけど情けはあるでしょうし」

ひなた荘にて、住民と師匠による小競り合いというか、争いというか……まあ、お互いの居場所を賭けた戦いからはや数日。

結局、俺は小さいからと和風喫茶の方へ預けられてしまいました。

朝だけは料理の仕込みにいくんですけどね。旅の間は料理を覚えないとやばい事も少なくなかった……あれ、おかしいな、涙が止まらないや。

「ど、どうしたんだ!?」

「なんでもないんです、はるかさん。ただ、師匠の鬼エピソードを思い出しただけですから」

「ああ……アイツは昔からそうだったんだよなぁ」

間違いなく、婆ちゃんの悪い部分とかをすべて吸収している逸材だ。

何度も逃げ出そうとした。まあ、無理だったけど。

途中から変装の技術を身につけようとしたり、見破るために表情や目を見てなんとか判断しようとしたり。

師匠、普通の笑顔というか、笑い顔だけは苦手だからそこで見抜くしかないけど。

「そういえば、あいつ等一回ひなた荘を出て行きそうだったぞ」

「どうせすぐに戻ったんでしょう。見るからに諦め悪そうだし、なんか師匠の天敵の予感がします。っていうか、一矢報いるチャンス？」

「おい、師匠は敬うものじゃないのか？」

「俺のスタンスは基本的に、師匠だろうと何だろうと、自分のもてる全てで上回れですから。必ずや、面白い表情をこの一眼レフで激写してやりますよ!!」

「……師匠が師匠なら、弟子も弟子だよ」

「まだまだ俺の変装は甘いですけど、浦島流柔術の一つは免許皆伝ものですよ！」

「ほぉ、そりゃ凄い……だが、何を極めたんだ？」

「……地獄極楽カメ縛り」

「なんでそれを極めた!?」

だって、師匠隙あらばこればっかり教えてくるから調子に乗って……

◇◇◇

不毛な会話から数時間後、ひなた荘住人から師匠の歓迎会をするから手伝って欲しい

といわれたので手伝うことになりました。
　あれ、俺は……？
「で、や……可奈子の笑っている写真とかが欲しいんやけど」
「そんなものありませんよ。少なくとも、俺は見たことないです。というか、師匠の笑っている顔を激写するのも俺の目標ですよ。一年以上一緒にいても笑わないとか」
「うわぁ、筋金入りやな」
「だが、どうするのだ？」
　なんでも、師匠の笑顔のぬいぐるみをつくるのだとか。
　だけども……あ、そういえばあったような気がした。
「一枚だけ、師匠の笑っている顔が映っている写真があったと思います」
「ホントですか!?」
「しのぶさん、身を乗り出さない。カオラさん、武器はしまってね。あと、後で貸してくれ」
「自分の欲望をサラッと……」
「まあ、それはおいておいて……たぶん、一枚だけ笑っているのがあったはずです。見たことはないですけど」
「たぶん、景太郎と一緒に移っているやつだな。私も昔、何度か見たことがあるだけだけ

ど今でも持っているんじゃないか？」
「店長、本当ですか？」
はるかさんの証言も取れたし、まあ、あると思うけど……いまはこの幽霊を捕まえる掃除機みたいなやつのほうに目が放せない。
「こ、これは噂に聞くアレ？」
「そうや！　アレや!!」
「まて、スゥ……私がいるのに除霊用の装備が必要なのか!?　というか、なんで今それを出すんだ!?」
「モトコ、分かってへんな……」
「そうですよ、京都神鳴流はそんなに器が小さいんですか？」
「何の話だ……というか、何で剣を見せていないのに流派が分かるんだ？」
「ああ、スプリングフィールドって名前出したので分かるかと思いました。ちなみに、情報ソースは高畑・T・タカミチ」
「詠春さんの知り合いの子供……って、なんでここにいるんだ!?」
はっはっは。悩め悩め。
ちなみに、除霊アイテムは俺がここに来たことで雑霊が少しばかり活性化して増えたからです。パーティーの前に邪魔なのは一掃する予定だから。

「兄と一緒の学校に通うつもりだったんですけどね……入学試験落ちたんだ」
「なんか、すまん」
「いいんですよ。世界最高学府レベルのあいつ等がおかしいだけなんで」
「……ちなみに、兄の歳は？」
「同い年。双子ですよ」
ローニンズの青山素子さんは、そのまま崩れ落ちてしばらく使い物にならなかった。
俺の学力？　流石に東大は無理だよ……転生後も一応知識はあるから、高校レベルがまあ、大丈夫かな程度。
麻帆良に通えればいいから特に気にしてないけどね。
◇◇◇
その後、歓迎パーティーは開かれた。いや、開かれたっていっていいのか？
まあ、喫茶の方にいたらなんか騒がしくなって、先に始めたと思ったら……
何処をどう間違ったのか師匠ってば、歓迎パーティーを自分を追い出すための作戦と勘違い。
うっかりスキルでも持っているんじゃないかと疑いたくなりましたとさ。
「はい、コレみんなで作ったんです。可奈子さんのぬいぐるみ、もらってください！」
「いやぁ、カナコの笑った写真捜して作ったんや。あ、コレ返すわ」

「カオラさん、あんたのせいか」
どんちゃん騒ぎが聞こえてきたから急いできたんだ。だから、詳細に何があったのか分からないけど、三行でまとめるぜ。
皆がコソコソしているから怪しんだ師匠
写真がない。つまり、追い出すつもりだ、デストロイ
真実は、自分の歓迎パーティー。うっかり可奈子ちゃん
「言いたいことはそれだけですか?」
「ギブギブギブギブアイアンクローはヤメテー!?」
まあ、師匠の照れた顔とかばつの悪そうな顔とか激写できたからよしとしよう。
◇◇◇
そんなこんなで遂に、ひなた荘が旅館としてオープンする日がやってきました。とっても、昨日の今日ですけどね。
年上ばかりだからか丁寧口調がついて悲しい。
もっと弾けたい。もっと、もっと……
「ナベが悪い顔しとるんやけど」
「ほっとけスゥ。どうせくだらない事を考えている顔だ。ほら、あっちでキツネさんが同じ顔をしている」

「あーモトコーの言うとおりや」
　ちなみに、本日オープンといいつつ浦島景太郎が来るまで一見さんお断りなのを彼女達は知らない。
　ついでに、俺は知っているけどあえて言わない。なぜなら、そのほうが面白――
「モケッ!?」
「やっぱり黙ってたのかよ!!」
　ひなた荘ヒエラルキー最下層、ナベ・スプリングフィールド……サラのジークンドーにより撃沈。
　この様子をみていた浦島可奈子により地獄の特訓がかせられることになる。
「……だからって追い出さなくてもいいだろ」
「ご主人様は最近たるんでいるミャ」
「いつもながらに暴走していますね。いい意味で」
「うるさいよシチミにモツ」
　丸っこい猫的なナマモノのシチミ（少し毒舌な伸縮自在さん）と、胡乱なカエルのモツ（基本ボケのナマモノ）のダメだしを華麗にロマンキャンセル。
　さて、ひなた荘では今頃大騒ぎ。景太郎さんが近々帰ってくるらしくその準備だとか言っているけど……

「で、本当は？」
「師匠がライバルの景太郎さんへの好感度調査じゃないですか……っていうかいつの間に現れたんですかはるかさん」
「さっき。店の中じゃタバコ吸えないしさ……公園に一人で何やっているんだ？」
「いえ、ひたすら龍牙（気弾を撃つ浦島流の技）を連続で出していただけです」
「近所迷惑だから止めろ」
ちなみに、モツとシチミは人に見つからないように隠れました。
具体的には、俺の懐の中に。さっきからくすぐったくて仕方がない。特にモツはワザと脇の下とかくすぐってきやがる。
あとで的にするか。
（コレはＤｉｅピンチ!?）
（自業自得ですミャ）
さてと、このままはるかさんもすぐに戻れば続きが……
『おねがいっやめてお兄ちゃーん!!』
そうは問屋がおろさないのがこの世の中。
ひなた荘のほうからものすごい大声が……
「……なあ、今のって」

「師匠の声ですねぇ……たぶん、だれかに兄の格好させて好感度チェックやったんでしょうね。で、見ているうちにマジになって」
「アレか。いやぁ……ますますブラコンに磨きがかかっているじゃないか」
「ええ、一年以上行動を共にして分かりました。再会したら取り返しのつかないブラコンになります。っていうか、今は無意識っぽいですけど既に手遅れです」
きっと、血はつながっていないから大丈夫とか言い出すんだろうなぁ……
その後は師匠となるさんが公園にやってきたのではるかさんと身を潜めて観察しています。
二人でブランコに座って、仲良さそうに……違うな。アレは、アレは!?
「いいなぁ、私男の兄弟いないからなんかうらやましくって……カナちゃん、本当にお兄ちゃんのことが好きなんだね」
「――わないで」
「え?」
「……わかったようなことを言わないで」
いつも以上に冷えた視線でなるさんのほうを見る師匠。
ああ、逆鱗に触れちゃったのか。
「兄は誰にも渡さないわ、ひなた荘の誰にも。もちろん、なるさん……あなたにもね」

そういい残し、師匠はゆっくりとあるいて立ち去った。
なんていうか本当にブラコンだよ、手遅れだよ。
「あ、ちょっ」
「やめときな、無駄だよ」
「はるかさんにナベ君もいたんですか!?」
「なんかありそうだったんでそこの茂みに」
「なら出てきて下さいよ……でも、やっぱりあの年頃の子ってお兄さんにあこがれるものなんですかねー」
「……そうだといいんだがな」
「間違いなく違うと思いますよ」
「どういうこと?」
まず、あの年頃の女の子が兄に対してあそこまで好意を示すなんて殆どない。
加えて師匠のアレはベクトルが家族愛じゃないし、強度も段違い。
すなわち、出される答えは一つしかないのだが……
「まあ、鈍感でヘタレななるさんには分かりませんよ」
「……フンッ!」
「チェケラベイベ!?」

ひなた荘名物、成瀬川なるさんのお仕置きパンチは外傷はないのに吹っ飛ぶ奇跡の一品でした。

その後は日が落ちるまで一人、モツに向かって龍牙をぶっ放しまくりでした。

「オラオラオラオラオラオラオラオラ!!」

「おおおおお!?　中身が、中身が出るゥウッゥウ!?」

「町が汚れるからその辺で勘弁してやってほしいミャ」

「ワタシの心配は無しですかーッ」